

児童のつまずきから対話的な学びを創り出す授業デザイン

ー 小中接続を視野に入れて ー

学籍番号 239323

氏 名 遠水大我

主指導教員 東尾晃世

副指導教員 貞末 岳

1. 研究の背景と目的

1.1 背景

アルバイトやボランティア活動等で、算数から数学に変わったときに苦手意識を持つ生徒が多くなっているように感じている。それらの生徒だけでなく、多くの児童・生徒が、算数・数学がおもしろくない、わからないと学習に対する意欲をなくしている姿が見受けられる。算数の授業でつまずき、それをひきずったまま中学校に進学し、数学を学習しなければならないことが、数学を学習する意欲の低下の要因となっているのではないかと考える。

小学校学習指導要領解説算数編では、学習指導要領の改善理由の1つとして、「小学校と中学校の間で算数・数学の勉強に対する意識に差があり、小学校から中学校に移行すると、数学の学習に対し肯定的な回答をする生徒の割合が低下する傾向にある。」と述べている。TIMSS2019の質問紙調査では、「算数・数学の勉強は楽しい」という質問に、肯定的な割合が小学校は77%に対して、中学校は56%と21%も減少している。

そこで、小学校の段階から中学校接続を意識して授業デザインをすることで、数学の学習に対しての肯定的な割合が下がることを抑制できるのではと考え、研究に取り組むこととした。

1.2 目的

本研究の目的は、児童のつまずきを視点とした対話的な授業デザインを行い、中学校につながるような、児童が主体的に学ぶ授業づくりをすることである。

児童のつまずきを視点とする理由は、つまずきや誤答を恥ずかしがり、主体的に授業に参加する児童が少ないことに課題を感じているからである。つまずきや誤答は全く恥ずべきことではなく、そのつまずきや誤答を認め、これらを克服するために、人との関わりを通して主体的に課題に取り組む姿勢を身につけてほしいと願っている。主体的に学ぶ児童を育てるために、課題と対峙した時に、自分が考えたことをクラスメイトと共有して解決する協働的な学びの楽しさ、自分たちで解決できる楽しさを感じてもらうこと、さらには人とのつながりを感じることで、自己肯定感を生み出して、学習に主体的に取り組む児童を育てたいと考える。

2. 小中接続の課題に係る対話的な学び

2.1 小中接続の課題

算数・数学の相違の一つとして、抽象度がある。小学校算数の段階から中学校数学を見据えたカリキュラムは作成されているものの、児童・生徒が算数から数学へのギャップを感じているという事実は否めない。

算数で学んだことを積み重ね、連続性を失わずに小中をうまくつなぐことができることが理想ではあるが、既習事項の積み上げが困難である現実がある。しかも、学級の人数は少なくなく、学力差のある学級集団も多いことから、小中の接続は容易ではないことがわかる。

2.2 中学校への接続の視点でみた対話的な学び

西尾は、対話的な学びを3つの視点、(ア)自己との対話、(イ)他者との対話、(ウ)教師との対話に、藤井・稲田は、『教材との対話』『既習との対話』『自己との対話』『子供と子供との対話』『子供と教師の対話』と分類した。だから、自分は、他者との対話、特に児童同士の対話に着目して問題に対して協働的に取り組む経験やそこから得られる達成感から中学校への接続へとつながる主体性の獲得を目指す。

3. 授業実践の成果と課題

3.1 成果

6年「データの活用」の授業実践では、大縄跳びの優勝クラスの予想を毎授業の最後に時間を取り、児童たちに学習内容に沿った分析で自分の優勝予想をノートに書く活動を取り入れたことで、児童同士の対話的な学びを実現する環境を構築することができた。

3.2 課題

対話的な活動をどの授業実践でもペアや同じ考えの児童とグループを作ることにしたことで、1つの考えに偏ってしまい、児童に対話的な活動が等しく保証することができなかった。自分と異なる考えの友達とグループを作ること、新たな考えに気づくことや自分の考えを高いレベルのものにし、さらに広く深い考えにできることを踏まえて、今後の課題とする。

4. 考察とまとめ

授業実践では、ペアでの対話や同じ考えの児童が集まったグループで対話する取り組みを進めた。実践を通して、同じ考えだけでなく、自分と違う考えをもつ児童が集まるようなグルーピングをし、対話する機会を設けることで、物事を多面的・多角的な視点で見ることができたり、自分の考えをさらに深く広げていくことができたりすることが分かった。今後は、様々な児童のつまずきをもとに対話的な学びを創り出し、児童が常に主体的に考えることができるような授業デザインを検討していきたい。